

ドイツの言語と文化 第5回 文化パート2

範囲：教科書第二章、第三章（S. 17 - S. 49）

第二章 民主主義か独裁か（S.17 - S. 33）

章タイトル…竹内好が安保闘争に対して書いた新聞コラム「民主か独裁か」（1960年）を意識したもの

仮政府と労兵協議会（S. 17）

社会民主党と独立社会民主党の連立協議（1918年11月）

・独立社会民主党極左派（スパルタクス団、オップロイテ）

…ドイツは社会主義共和国となって全権を労兵協議会が掌握し、「ブルジョワ分子」を排除すべき

・独立社会民主党主流派…中間的態度

・（多数派）社会民主党…社会主義共和国は議会を召集して合意を得てから、「ブルジョワ分子」排除には反対

→連立協議の結果…独立社会民主党は極左派を排除して仮政府に入閣（フーゴー・ハーゼ Hugo Haase 党首ら3人）

労兵協議会の奪い合い（オップロイテ vs. 多数派）

…兵士を押さえた多数派がツィルクス・ブッシュでのベルリン労兵協議会大会で勝利
プロイセン政府を残すことが決定…ここでも多数派が勝利

仮政府の性格（S. 19）

仮政府による連合国との休戦条約（1918年11月18日）→賠償金、復員、食糧問題

仮政府の施政方針演説…純社会主義政策を掲げる、戒厳状態の廃止、集会結社の自由、検閲の廃止、労働者保護立法の復活、8時間労働制への移行、20歳以上の男女による選挙権（比例代表制）

→土地、産業の国有化が含まれなかった

→原理的な社会主義を訴える勢力（オップロイテなど）による反対

* マルクス主義においては、**生産手段の共有**が掲げられる。

仮政府は、混乱回避と食料問題解決のため、従来の官僚を受け入れる（＝ブルジョワ分子を排除せず）。

仮政府の構成

・フリードリヒ・エーベルト…多数派社会民主党（首相格）

・フィリップ・シャイデマン…多数派社会民主党

- ・ オットー・ランズベルク（Otto Landsberg）…多数派社会民主党
 - ・ フーゴー・ハーゼ…独立社会民主党、多数派に同調
 - ・ ヴィルヘルム・ディットマン（Wilhelm Dittmann）…独立社会民主党、多数派に同調
 - ・ エミール・バルト…独立社会民主党、オップロイテの指導者
- 各決議にはバルトのみ反対することになり、実質的に5対1となる。

労兵協議会思想の由来 (S. 21)

議会主義（多数派）⇔労兵協議会（オップロイテ、スパルタクス団）

労兵協議会（ソヴィエト、レーテ）思想の由来

- ・ マルクス、エンゲルスには見られない。
- ・ 1905年の第一次ロシア革命で自然発生的に現れる。
- ・ 1917年の二月革命：レーニン「すべての権力をソヴィエトへ」
- ・ 十月革命後のレーニンはまず議会主義をとろうとしたが、多数を掌握できなかったためソヴィエトをそのまま国家機関とする。

ロシアでの労働組合の欠如→労働者の不満により、工場における自主的代表的選出へ

⇔ドイツには労働組合が存在したが、戦争協力で労働者の信頼を失い、ロシア革命の影響もあって、第一次世界大戦末期から労兵協議会が誕生

対立の激化 (S. 24)

生産手段の国有化（＝社会化）問題

- ・ 多数派…戦後の混乱のなかで行うことに反対、ただし将来の実行を見越して「社会化委員会」を創設
- ・ 極左派…即座に行うべきと主張

議会問題

- ・ 多数派…議会の早期召集を説く
- ・ 極左派（特にオップロイテ）
…労兵協議会の執行委員会を掌握し、仮政府を制御しようとする

労兵協議会全国大会 (S. 26)

労兵協議会執行委員会はベルリンだけのものだったので、全国大会を開く必要が生じる

→労兵協議会全国大会では多数派社会民主党が勝利

労兵協議会のスタンス

- ・ ベルリン…オップロイテ、スパルタクス団が優勢
- ・ 地方…多数派社会民主党寄り、反戦ではあってもそれ以上の社会変革要求はなし

エーベルトとグレーナー (S. 29)

軍隊改革問題

- ・ 労兵協議会全国大会での決議
- … 労兵協議会による軍の指揮、階級章の撤廃、兵士による将校の選挙
- ・ エーベルトら社会民主党首脳
- … 内心では上記に反対
 - ヴィルヘルム・グレーナー（Wilhelm Groener）参謀次長とのあいだに、軍の共和国支持と引き換えに労兵協議会からの軍の独立を守る密約を締結
 - 労兵協議会全国大会決議の実施を棚上げにしようとする
 - それまで多数派に同調していたハーゼら独立社会民主党閣僚との軋轢

人民海兵団事件・独立派の脱退 (S. 31)

- ベルリンの軍事的空白
- 給料未払いに対する「人民海兵団」の暴動
 - 仮政府による軍隊投入、武装解除
 - エーベルトの責任を追及した独立社会民主党が政府から離脱

第二章のまとめ (補足)

	独立社民党極左派	独立社民党主流派	多数派社民党
構成員（太字は閣僚）	バルト （オップロイテ）、リープクネヒト、ルクセンブルク（スパルタクス団）	ハーゼ、ディットマン	エーベルト、シャイデマン、ランズベルク
生産手段国有化	即座に	将来的に	将来的に
議会／労兵協議会	労兵協議会の独裁	労兵協議会を過度的に認め、将来的には議会主義	議会の即時召集
軍隊	労兵協議会の指揮	労兵協議会の指揮	現状維持

独立社会民主党主流派は、生産手段国有化や議会問題では多数派社会民主党に同調していたが、軍隊問題をめぐって仮政府から離脱した。

第三章 一月蜂起 (S. 34-49)

共産党の成立 (S. 34)

独立社会民主党反主流（極左）派内でのオップロイテとスパルタクス団の対立

- ・ スパルタクス団…思想家、文筆家など知識人が多数
- 宣伝活動と街頭での示威行動によって革命を達成しようとする

- ・ オップロイテ…労働組合から発生、労働者が多数

職場で組織した労働者によって秘密裡に革命を達成しようとする

→スパルタクス団のみ独立社会民主党を脱退、**ドイツ共産党・スパルタクス団**を結成（1918年12月30日）

ドイツ共産党創立大会…指導者のリープクネヒト、ルクセンブルクの反対にもかかわらず、
議会選挙ボイコットを決議

一月蜂起 (S. 37)

ベルリン警視総監エミール・アイヒホルン (Emil Eichhorn、独立社会民主党) の罷免

→共産党とオップロイテによるデモの呼びかけ、大規模なデモへ

→リープクネヒトおよび一部の独立社会民主党幹部により革命委員会が結成、エーベルト内閣打倒へ

→社会民主党機関誌『前進 (Vorwärts)』などメディアを占領

→しかし、人民海兵団などベルリンの軍隊が動かず、政府が有利に

→最近入閣した**グスタフ・ノスケ** (Gustav Noske) が動員した**義勇軍**組織によって鎮圧

→リープクネヒト、ルクセンブルクの惨殺

- * 義勇軍 (Freikorps) …復員軍人などから構成された非公式の軍事組織

Vgl. 今井宏昌『暴力の経験史: 第一次世界大戦後ドイツの義勇軍経験 1918~1923』法律文化社、2016年

蜂起の鎮圧 (S. 39)

一月蜂起は「**スパルタクス団蜂起**」と言われるが、スパルタクス団 (やオップロイテ) が組織的に起こしたものではない。

- ・リープクネヒトは参加
- ・ルクセンブルクは当初は反対
- ・オップロイテ指導部 (リヒャルト・ミュラーら) は反対
- ・ただし、スパルタクス団やオップロイテ構成員が多数参加

ローザ・ルクセンブルク (S. 40)

一月蜂起前後のルクセンブルクの立場

- ・政治闘争は長期的仕事なので、いまは政府打倒を目指さず、労兵協議会の再編に努力すべき (共産党創立大会)

→一月蜂起には反対

- ・ただし、一月蜂起の勃発後は参加、失敗後に殺されることに

ルクセンブルクの評価

- ・ボルシェヴィキの一党独裁には反対 (『ロシア革命論』)

* ローザ・ルクセンブルク『獄中からの手紙』秋元寿恵夫訳、岩波文庫、1982年

** ローザ・ルクセンブルク『ロシア革命論』伊藤成彦／丸山敬一訳、論創社、1985年

→スターリン独裁ののちに再評価

→ソ連型共産主義と異なる西欧型共産主義（ユーロ・コミュニズム）の先駆者とする評価も生じる

- ・著者の評価：「彼女の非妥協的な闘争と極左主義への反対とは彼女のなかで矛盾なく結合していたとはいえない」

「労兵協議会の独裁を主張しながら背後からそれに方向を与える一政党の独裁を否定したことは、実は不可能事を求めることであった。ここで彼女の思想の底にあったのは、大衆の「自発性」へのほとんど宗教的ともいうべき信頼である。しかもこの自発性とは、大衆が必ず革命化して彼女の望むような社会主義を実現するであろうというきわめて独断的なものである。」

軍人の復活 (S. 43)

一月蜂起の鎮圧に際しては、社会民主党閣僚のノスケによって元軍人からなる義勇軍が投入される

当時のドイツの軍隊の状況

- ・国内の軍隊…革命によってほぼ解体
- ・前線にいた軍隊…ヒンデンプルク参謀総長、グレーナー参謀次長のもと存続
労兵協議会、帝政支持の幹部、共和国支持の幹部（グレーナーら）が鼎立して共存
共和国を転覆する力まではなし

→オップロイテやスパルタクス団（「ボルシェヴィズム」）と闘うため、前線から帰ってきた元兵士や国内の大学生などから義勇軍を募る

→義勇軍には共和制擁護意識が完全になく、憎悪や闘争心に燃えて残虐行為へ

ナチスの萌芽 (S. 46)

一月蜂起後の社会民主党

- ・少し前まで連立を組んでいた独立社会民主党との対話が不可能に

→独立社会民主党は共産党に接近

- ・社会民主党支持層も離反

一月蜂起に関する著者の評価

- ・社会民主党…秩序を維持しつつ民主主義を確立しようとしたことは評価できるが、労兵協議会を全否定して人心を失う

- ・独立社会民主党主流派…過度的に労兵協議会を認めて議会制移行を目指すのは評価できる
 - ・極左派…政府打倒を目的として社会混乱を助長し、民主主義の弱体化に責任を持つ
- 社会民主党政府が利用した義勇軍がナチスの萌芽となる
- * 義勇軍がナチスの先駆と言えるのかについては論争がある

第三章のまとめ （補足）

	左翼	政府	軍隊
構成員	独立社会民主党、共産党・スパルタクス団、オップロイテ	社会民主党	旧軍隊（+義勇軍）
1919年初頭の主張	<ul style="list-style-type: none"> ・スパルタクス団：街頭行動からの革命 ・オップロイテ：組織による革命 	<ul style="list-style-type: none"> ・議会の即時召集→議会制民主主義 	<ul style="list-style-type: none"> ・参謀次長グレーナーは政府支持 ・労兵協議会の軍隊改革には反対
1919年初頭の情勢	<ul style="list-style-type: none"> ・独立社民党は政府から離脱 ・スパルタクス団が独立社民党を離党して共産党結成 	<ul style="list-style-type: none"> ・社民党のみで仮政府を構成 ・閣僚に+ノスケ、ルドルフ・ヴィッセル（Rudolf Wissell） 	<ul style="list-style-type: none"> ・労兵協議会、帝政支持の将校、共和国支持の将校が鼎立 ・兵力を補うため、義勇軍を募集
一月蜂起	<ul style="list-style-type: none"> ・リープクネヒトを中心として革命委員会結成 ・スパルタクス団、オップロイテから多数が参加 	<ul style="list-style-type: none"> ・提携して一月蜂起に対応 ・ノスケが中心となって義勇軍を投入 	
結果	<ul style="list-style-type: none"> ・蜂起は失敗 ・リープクネヒト、ルクセンブルクらが死亡 	<ul style="list-style-type: none"> ・支持層の離反 	<ul style="list-style-type: none"> ・この時点の軍隊には共和国転覆の意図はなし ・義勇軍のなかにはナチスに流れる者も

連絡先など

講師のメールアドレス：token@nifty.com 講師のウェブサイト：<http://hhasegawa.la.coocan.jp/>

授業のサイト（配付資料あり）：<http://hhasegawa.la.coocan.jp/lecture/2018/2018sitDeutscheSpracheundKultur.html>